

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25780517

研究課題名(和文)越境する日本人家族の教育戦略と「グローバル型能力」形成に関する比較考察

研究課題名(英文)A Comparative Study of Education Strategies among Transnational Japanese Families and Development of 'Global Competencies'

研究代表者

額賀 美紗子(Nukaga, Misako)

東京大学・大学院教育学研究科(教育学部)・准教授

研究者番号：60586361

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、海外在住日本人家族のトランスナショナルな教育戦略に焦点を当てながら、子どもたちの「グローバル型能力」の形成過程について明らかにすることを目的とした。アメリカ3地域でフィールドワークを行ったほか、海外から帰国した若者25名に対して複数回にわたって半構造インタビューを実施した。その結果、ホスト社会の地域特性によって日本人の親の間に異なる教育戦略がみられること、また帰国後の若者たちの「グローバル型能力」の伸長や活用の程度は、日本の学校や企業における「グローバル人材」理解やトランスナショナルな空間性に制約されていることが示唆された。

研究成果の概要(英文): This study aims to elucidate the process of children's 'global competencies' development by focusing on transnational education strategies among Japanese families living abroad. The data encompasses fieldwork in three communities in the United States, as well as semi-structured interviews with 25 youths who returned from overseas. It reveals that Japanese parents develop different education strategies that are contingent on the host society community context. It also finds that the degree to which returnee youths develop and use 'global competencies' is constrained by how Japanese schools and companies understand the concept of 'global talent' and how they allow transnational social spaces.

研究分野：教育社会学

キーワード：トランスナショナリズム 教育戦略 日本人家族 グローバル型能力 若者 子ども

1. 研究開始当初の背景

経済のグローバル化を背景に、人々の国際移動が地球規模で活性化している。この流れの中で、海外に移住する日本人の数も増加の一途をたどり、外務省統計によると2010年には30年前の約2倍にあたる113万人の日本国籍保有者が海外に居住している。そのうちの7割は帰国を意図する「長期滞在者」であり、残りの3割は受け入れ社会の永住権を有する「永住者」である。前者には民間企業の駐在員家族が含まれ、その子どもたちの受け入れ社会への適応および帰国後の再適応については「海外子女教育」という括りの中で、多くの理論的・実践的研究が蓄積されてきた(例えば箕浦1984)。この中には「長期滞在者」と「永住者」が含まれるが、両者の区分は近年曖昧になっていることが指摘されている(町村1999; 佃2007)。

こうした変化の中、海外在住日本人家族の生活世界 特に親の教育戦略や子どものアイデンティティ・能力や進路形成 をトランスナショナリズムという視点から捉える必要性が提起される。トランスナショナリズムとは、移民が国境を超えるネットワークを構築し、母国と受け入れ国の両方にかかわる現象を分析する方法論的視角として、1990年代半ば頃に北米の移民研究者から提起されたものである(Basch et al. 1994)。かつてはエリート層だけに限られていたトランスナショナルな実践は、国境を越えるコミュニケーション手段や移動手段、制度や組織の急速な発達によって、近年はより多様な階層の人々が従事できるものになっている(Portes et al. 1999)。そのことは、国境を越えて人やモノや情報が行き交い、複雑に絡み合った社会関係のネットワークによって構成される「トランスナショナルな社会空間」(Levitt and Schiller 2004)の拡大を促している。

これまでアメリカに住む日本人家族については、子どもを現地校に通わせながらも、そのまなざしは常に日本にのみ向き、現地社会との関わりが希薄であることが強調されてきた(岡田1993; 南2000; 山田2004; Kurotani 2005)。ホスト社会への「同化」か、それともホスト社会からの「分離」かという、二項対立的に問題設定がなされ、「日本ともホスト社会とも関係を繋ぐ」トランスナショナルな意識や生活様式への研究視点が欠けていた。しかし、2000年代初頭にロサンゼルス日本人家族を調査した山田(2007)は、1990年代初頭に同地域を調査した時と比べて、日本の方を向きつつも自由に現地社会との間を行き来する日本人の親が増えたことを指摘する。そして、「親たち、子ども自身がグローバルな社会での自分といった視点を基盤に教育や自分の居場所を選択するように」なっており、「トランスナショナルな意識を持つ新しい像が確実に増加しているように思われる」(166)と考察する。山田は、このトランスナショナルな「越境する日本

人」という視点から、あらためて家族の教育意識や生活様式を検討することを課題として挙げている。

この問題提起を受けて、筆者は2006年からロサンゼルスにおいて日本人家族のトランスナショナルな教育戦略に関するフィールドワークを継続的に行ってきた。母親たちのインタビューから明らかになったのは、彼女たちが、日本に帰国した後のことや日本人としてのアイデンティティへの配慮から、日本語や日本の学校で重視される基礎学力といった「日本型能力」の重要性を強調すると同時に、グローバル化を視野に入れた能力の育成を重視していたことである。この「グローバル型能力」は英語力だけにとどまらず、広い視野、社交力、順応力、自己表現力などを含む。この目標達成のため、母親たちはロサンゼルスのローカル社会に適応しつつ、日本との紐帯を維持し、両国の教育資源を柔軟に活用する「トランスナショナルな教育戦略」に邁進していた。

その影響下にある子どもたちは日本とアメリカを跨ぐトランスナショナルな社会空間に埋め込まれ、「日本人」「アメリカ人」「アジア系」を混然一体化した重層的アイデンティティの形成途上にあつた。子どもたちへのインタビューや現地校での参与観察からは、子どもたちが重層的アイデンティティを形成していく過程で、同時に「順応力(=状況に応じて言語や態度、行動を切り替えたり、2つ(以上)の文化を混ぜあわせたりすることで、居心地の良い関係性や空間を確保する能力)」や、「社交力(=エスニック境界を巧みに操作して自集団のメンバーとも、他集団のメンバーとも親しく対等な立場で交流する能力)」を獲得していることが明らかになり、それらはグローバル時代の多様性に対応した「グローバル型能力」として考察できる。

しかし、こうした重層的アイデンティティや「グローバル型能力」の形成は、ロサンゼルスの富裕層が集中する地域だからこそ得られた結果である可能性は高い。つまり、同じ海外居住の日本人であっても、階層や地域の違いによって、異なる教育戦略、アイデンティティや能力形成が見られると予測される。多様化する「越境する日本人家族」の教育戦略と、それが子どもの日本人アイデンティティと能力に与える影響を理解するために、家族の階層や居住する地域に関して調査対象を広げて比較検討する必要がある。

また、海外で育った日本人の子どもたちが大学進学にあたって「帰国生特別枠」を利用し、日本に帰国する現象が近年顕著になっている。この変化は近年「グローバル人材育成」に力を入れる日本の高等教育や企業の動きと呼応している。このような日本の社会的文脈において、「帰国生」が自らの「グローバル型能力」をどのように把握し、それをどのようにキャリアに活かそうと考えているかという問題について考察する必要がある。

2. 研究の目的

トランスナショナルな社会空間の構造：ロサンゼルス、ホノルル、サンフランシスコの3地域において日本人の子どもたちが埋め込まれる「トランスナショナルな社会空間」の実態把握をする。それぞれの地域において、補習校、塾、日本人会といった組織やネットワークが現地社会・日本社会とどのように関わっているのかを明らかにし、日本人家族がどのようにして両社会の資源を調達しているのかを検討する。

親のトランスナショナルな教育戦略：ロサンゼルス、ホノルル、サンフランシスコの3地域における日本人の親の教育戦略について明らかにし、比較検討する。

子供／若者の日本再適応過程における自己能力理解とキャリア形成：幼少期から長期にわたって海外に滞在した若者たちは、どのように日本の学校／大学に再適応し、どのような能力を培っているのか。帰国した若者たちが海外で獲得した能力をどのように再構築し、キャリアに活かそうとしているか、その過程を検討する。

3. 研究の方法

研究期間を通じて、幼少期から海外に滞在した後大学生時点で日本に帰国した18歳から23歳までの若者25名に複数回にわたって半構造インタビューを実施した。そのほか、ロサンゼルス、ホノルルおよびサンフランシスコにおいて日本人の母親計25名に（追跡）半構造化インタビューを行い、その子どもたちが通う公立小学校において参与観察を行った。また学校の校長・教師にも半構造化インタビューを行い、特にエスニック・マイノリティ生徒に対する配慮や教育上の工夫について質問した。

4. 研究成果

ロサンゼルスに住む日本人の母親38名を対象とした半構造化インタビューをもとに、トランスナショナルな教育戦略の目的と実践について明らかにした。ロサンゼルスの日本人コミュニティは日米の文化を架橋するトランスナショナルな社会空間として日本人家族のトランスナショナルな教育戦略を支えており、その結果として子どもたちはバイリンガリズム、順応力、社交力といった「グローバル型能力」を獲得している。一方、母親たちはアメリカ社会において「日本人」であることと「良い母」であることのアイデンティティ葛藤を抱え、ジェンダーとエスニシティの構造の制約を受けながら、新しい「日本人の母親」イメージと実践を創造していることを明らかにした。（図書、研究論文）

ホノルル在住の日本人の母親に対して行ったインタビューをもとに、トランスナシ

ョナルな教育戦略という視点から親子が現地の日本人補習授業校をどのように意味づけているのかをロサンゼルス事例と比較考察し、論文としてまとめた。ホノルルの母親たちはコスモポリタン志向が強く、日本の学校文化を再現する補習校の学習に対して葛藤を抱えていることが明らかになった。また、補習校で日本語学習を継続するためには、家族の経済的安定および親子の情緒的絆が重要であることも示唆された。このことからグローバル型能力育成という見地から従来の補習校のあり方を見直す必要性が提起される。（研究論文）

越境する若者・子どもたちの「居場所」について国内外の研究をレビューし、異文化間教育学と居場所研究の交錯について論文にまとめた。国境を物理的・認知的・情緒的に超えて生活する子どもたちの増大は、居場所が複数の国にまたがって存在したり、バーチャルな空間に拡大していることを意味する。トランスナショナリズムやディアスポラといった理論的視点を居場所研究に採用し、越境する子どもたちの生活世界を実証的に検討ことの重要性が示唆される。（研究論文）

帰国生がどのようなグローバル人材に成長しうるかという課題を解明するため、8年の長期にわたって複数回行った追跡インタビューと参与観察に基づいて帰国生の日本再適応過程を検討した。分析の結果、若者たちの能力形成や将来展望は再適応過程において「グローバル型能力」を身長して国際移動志向が強まる場合と、逆に「グローバル能力」を矮小化してとらえて国内安住志向が高まる場合とに分岐することが明らかになった。こうした分岐には国内の有名大学進学を重視する学校文化への同化圧力の強さや、帰国後にトランスナショナルな実践に主体的に取り組む機会の有無が影響を与えていると考えられる。（研究論文、学会発表）

帰国大学生25名へのインタビューの分析をもとに、海外経験が日本帰国後の能力とキャリア形成に与える影響について明らかにした。1)対象者は「帰国生」というポジションナリティから同世代の日本人と自らを比較し、能力やキャリアの卓越化を図ろうとしていた。2)その際に強調されるのは、【高度な語学力】【積極性・行動力】【コミュニケーション力】【異文化への理解と寛容】【適応力・順応力】【多角的な視野】といった能力である。3)対象者の大半は海外につながるキャリアを希望しており、海外で獲得した能力を企業面接で積極的にアピールする戦術をとっていた。4)企業側にもまた海外帰国生を高く評価する態度がみられたが、一方で英語力のみ注目が集まる傾向があり、異文化理解力やマイノリティへの興味といった関心や能力は企業面接の中で必ずしも評価

されていなかった。帰国生が日本社会において「グローバル型能力」を活かしていくためには、帰国生が海外で培う多面的な能力に大学や企業が注目する必要性が示唆される。こうした帰国生の自己能力理解や活用を、大学留学経験者と比較して考察した(研究論文、学会発表)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

Nukaga, Misako 2013. "Planning for a Successful Return Home: Transnational Habitus and Education Strategies among Japanese Expatriate Mothers in Los Angeles" *International Sociology* 28(1):66-83. (査読有り)

額賀美紗子 2014. 「トランスナショナルな教育戦略における日本人補習校の意味づけ - ハワイに移住した母親と子どもの視点から - 」『海外子女教育の新展開に関する研究プロジェクト報告書 - 新しい補習授業校のあり方を探る - 』7-27. (査読無し)

額賀美紗子 2014. 「越境する若者と複数の「居場所」」『異文化間教育』(40)1-17. (査読有り)

額賀美紗子 2016. 「帰国生の日本再適応過程における「グローバル型能力」の変容 - 国内安住志向と国際移動志向への分岐」『国際教育評論』(13) 1-17. (査読有り)

岡村郁子・額賀美紗子 2018. 「海外経験がキャリア形成にもたらすインパクト」 - 大学短期留学経験者と帰国生の語りから - 』『異文化間教育』48. 印刷中. (査読有り)

[学会発表](計3件)

Nukaga, Misako. "Becoming 'Cosmopolitan Japanese': How Japanese Adolescents Employ Their Transnational Experience for their Empowerment," *International Sociological Association World Congress of Sociology*. Aug. 2014.

岡村郁子・額賀美紗子 「大学生の「グローバルな能力」獲得 - 3 タイプの国際経験による比較 - 」 異文化間教育学会大会 2017年6月.

額賀美紗子 「学校は文化的多様性と民主主義をどのように教えているか - 日米比較の視点から - 」子ども社会学会大会 2017年3月.

[図書](計1件)

額賀美紗子 2013. 『越境する日本人家族と教育 「グローバル型能力」育成の葛藤』勁草書房

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

額賀 美紗子 (NUKAGA, Misako)
東京大学・教育学研究科・准教授
研究者番号: 60586361

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()